

平成24年度採択プログラム 事後評価調書

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	金沢大学	整理番号	L01
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) やまざき こうえつ 氏名・職名 山崎 光悦 (金沢大学学長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) しばた まさよし (平成30年4月1日変更) 氏名・職名 柴田 正良 (金沢大学理事(教育・法科大学院強化担当)/副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) かがみ はるや 氏名・職名 鏡味 治也 (金沢大学大学院 人間社会環境研究科・教授)		
4. 類型	L <複合領域型(多文化共生社会)>		
5.	プログラム名称	文化資源マネージャー養成プログラム	
	英語名称	Graduate Program in Cultural Resource Management	
	副題		
6. 授与する博士 学位分野・名称	博士(社会環境学 又は 文学 又は 学術) 付記:文化資源マネージャー養成プログラム修了		
7. 主要分科	(① 文化人類学) (② 史学) (③ 哲学) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	計算基盤、文化財科学・博物館学、地域研究、芸術学、言語学、法学、政治学、経済学、社会学、教育学		
8. 主要細目	(① 文化人類学・民俗学) (② 考古学) (③ 美術史) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
	メディア情報学・データベース、文化財科学・博物館学、地域研究、宗教学、思想史、美学・芸術諸学、芸術一般、言語学、国際法学、政治学、国際関係論、財政・公共経済、社会学、教育社会学		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	大学院人間社会環境研究科、博士前期課程人文学専攻、同法学・政治学専攻、同経済学専攻、同地域創造学専攻、同国際学専攻、博士後期課程人間社会環境学専攻		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名			
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名			
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	アジア太平洋無形文化遺産研究センター、金沢市、北京大学考古文博学院、チェンマイ大学大学院社会科学 研究科、バンドン工科大学芸術・デザイン学部、ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学		

14. プログラム担当者の構成 計 26 名	
外国人の人数 5 人 [19.2 %]	女性の人数 6 人 [23.1 %]
プログラム実施大学に属する者の割合 [69.2 %]	
プログラム実施大学に属する者 18 人	プログラム実施大学以外に属する者 8 人
そのうち、他大学等を経験したことのある者 9 人	そのうち、大学等以外に属する者 2 人

15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
(プログラム責任者) 柴田 正良 (H30.4.1変更)	シバタ マサヨシ		理事(教育・法科大学院強化担当)・副学長	現代哲学・修士 (文学)	プログラムと全学的教育制度施策間の調整・連携
(プログラムコーディネーター) 鏡味 治也	かがみ 治也		人間社会研究域人間科学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	文化人類学・博士 (学術)	プログラム運営主幹、伝承文化資源に関するカリキュラム整備、インドネシア協定校との連携・調整
中村 慎一 (H30.4.1変更)	ナカムラ シンイチ		人間社会研究域歴史言語文化学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	考古学、文化遺産学・博士(文学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
藤井 純夫	フジイ スミタ		人間社会研究域歴史言語文化学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、後期課程人間社会環境学)・教授	西アジア考古学・博士(文学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
中村 誠一	ナカムラ セイイチ		人間社会研究域附属国際文化資源学研究中心(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻)・教授	マヤ考古学、世界遺産学・修士(文化科学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
森 雅秀	モリ マサヒデ		人間社会研究域人間科学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	仏教学、比較文化学・Ph.D	文化資源情報学に関するカリキュラム整備
西村 聡	ニシムラ サトシ		人間社会研究域歴史言語文化学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、後期課程人間社会環境学)・教授	日本文学・博士(文学)	伝承文化資源に関するカリキュラム整備
西本 陽一	ニシモト ヨウイチ		人間社会研究域人間科学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	文化人類学・博士(学術)	伝承文化資源に関するカリキュラム整備、タイ協定校との連携・調整
上田 望	ウエダ ノゾム		人間社会研究域歴史言語文化学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、後期課程人間社会環境学)・教授	中国文学・博士(文学)	伝承文化資源に関するカリキュラム整備
矢口 直道	ヤグチ ナオミチ		人間社会研究域人間科学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・准教授	東洋建築史・博士(工学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
足立 拓朗	アダチ タクロウ		人間社会研究域歴史言語文化学系(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻)・准教授	考古学、博物館学・博士(文学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
大友 信秀	オトモ ノブヒデ		人間社会研究域法学系(人間社会環境研究科・博士前期課程法学・政治学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	知的財産法、ブランディング・博士(法学)	知的財産法に関するカリキュラム整備
正木 響	マサキ トヨム		人間社会研究域経済学経営学系(人間社会環境研究科・博士前期課程経済学専攻、博士後期課程人間社会環境学)・教授	世界経済論・博士(経済学)	世界経済論に関するカリキュラム整備
山形 真理子 (H29.4.3変更)	ヤマガタ マリコ		岡山理科大学・教授、金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究中心・客員教授	東南アジア考古学・博士(文学)	ベトナム協定校との連携・調整
秦 小麗	シノ ショウレイ		人間社会研究域附属国際文化資源学研究中心(人間社会環境研究科・博士前期課程人文学専攻)・特任准教授	東アジア考古学・博士(文学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備、中国協定校との連携・調整
田村うらら (H30.4.1変更)	タムラ ウララ		人間社会研究域人間科学系・准教授	人間環境学・博士(人間・環境学)	現地研修・調査実習指導、国際ワークショップ企画運営指導

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成30年度における役割)
菅原 裕文 (H28. 4. 1追加)	スガウラ ヒロミ		人間社会研究域歴史言語文化系(人間社会環境研究科博士前期課程人文学専攻、博士後期課程人間社会環境学専攻)・准教授	西洋美術史、博士(文学)	形態文化資源に関するカリキュラム整備
河合 望 (H29. 4. 1追加)	カイ ノブム		新学術創成研究機構・准教授	エジプト考古学、エジプト学、文化遺産学、博物館学、比較文明学、Ph. D	博物館学に関するカリキュラム
中野 涼子 (H29. 4. 3追加)	カノ リョウコ		人間社会研究域法学系(人間社会環境研究科博士前期課程国際学専攻)・准教授	国際関係理論、国際関係思想、博士(国際関係学)	国際関係論に関するカリキュラム整備
關 雄二	セキ ユウジ		国立民族学博物館研究戦略センター・教授	アンデス考古学、文化遺産学・社会学修士	博物館を利用した実習に関するカリキュラム整備協力
大貫美佐子	オオスミ ミサコ		ユネスコアジア太平洋無形遺産研究センター(IRCI)・副所長	無形文化遺産保護、継承学、文化政策・文学士	伝承文化資源に関するカリキュラム整備協力
河原 清	カワ キヨシ		元金沢市歴史文化・部長、金沢大学客員教授	都市政策論・博士(社会環境学)	文化資源保護・継承・活用に際しての地方自治体政策に関するカリキュラムの整備協力
趙 輝	チョウ キ		北京大学考古文博学院・院長	中国考古学・修士(考古学)	留学生の推薦、本学との連絡・調整
Yos Santasombat	ヨット サンタソムバット		タイ国チェンマイ大学大学院・社会科学研究所・教授	文化人類学・Ph. D (Anthropology)	留学生の推薦、本学との連絡・調整
Dudy Wiyancoko	ドゥディ ウィヤンチャコ		Head of Industrial Product Design, Faculty of Fine Arts and Design, Institute Technology Bandung, Indonesia	プロダクトデザイン・Ph. D	留学生の推薦、本学との連絡・調整
Lam Thi My Dzung	ラム ティ ミ ズン		Lecturer Department of Archaeology, Director of Anthropology Museum, USSH, VNU	ベトナム考古学・Ph. D	留学生の推薦、本学との連絡・調整

16. プログラムの応募学生数、合格者数及び履修生数

本プログラムの過去のリーディングプログラム応募学生数等について記入してください。

(各年度3月31日現在(ただし平成30年度は提出日現在))

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度 *(今後の募集予定: 無)	
プログラム募集定員数	-	8	8	8	8	8	8	
① 応募 学生 数	-	10	14	8	15	14	13	
	うち留学生数	-	5	11	6	11	10	
	うち自大学出身者数	- (-)	3 (0)	3 (0)	1 (0)	2 (0)	2 (0)	1 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	7 (5)	11 (11)	7 (6)	13 (11)	12 (10)	12 (10)
	うち社会人学生数	- (-)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)
うち女性数	- (-)	8 (4)	10 (7)	5 (4)	9 (6)	10 (7)	11 (8)	
② 合格 者数	-	7	7	6	9	8	8	
	うち留学生数	-	4	4	4	5	4	5
	うち自大学出身者数	- (-)	0 (0)	2 (0)	1 (0)	2 (0)	2 (0)	1 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	7 (4)	5 (4)	5 (4)	7 (5)	6 (4)	7 (5)
	うち社会人学生数	- (-)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (0)	0 (0)
うち女性数	- (-)	6 (3)	5 (2)	4 (3)	7 (4)	5 (2)	6 (3)	
③ ②の うち 履修 生数	-	7	7	6	9	8	6	
	うち留学生数	-	4	4	4	5	4	4
	うち自大学出身者数	- (-)	0 (0)	2 (0)	1 (0)	2 (0)	2 (0)	0 (0)
	うち他大学出身者数	- (-)	7 (4)	5 (4)	5 (4)	7 (5)	6 (4)	6 (4)
	うち社会人学生数	- (-)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)
うち女性数	- (-)	6 (3)	5 (2)	4 (3)	7 (4)	5 (2)	4 (2)	
プログラム合格倍率 (応募学生数/合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	-	1.43倍	2.00倍	1.33倍	1.67倍	1.75倍	1.63倍	
充足率 (合格者数/募集定員)	-	88%	88%	75%	113%	100%	100%	

※留学生については、「うち留学生数」にカウントするとともに、うち自大学出身者数、うち他大学出身者数、うち社会人学生数、うち女性数の()に内数を記入してください。

※平成30年度*(今後の募集予定:有・無)については、平成30年度内に履修を開始する学生を募集予定の場合(秋入学等)は「有」に、募集予定がない場合は「無」に印を付けてください。

また、「有」の場合は、当該予定分については表中には含めず、備考欄へ募集時期及び募集予定人数を記入してください。

※編入学生がいる場合は、年度ごとの内訳を備考欄に記入してください。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

プログラムの概要

本プログラムは、人類文化の多様性とその相互尊重の理念を基盤に、世界各国・各地域で継承されてきた文化資源の将来に向けての意義と有用性を探求し、人類全体に向けたその活用策を案出・実践する「ローカルな文化資源のグローバルな活用を可能にする資源発掘・管理・活用策提案能力を身につけた人材」、すなわち文化資源マネージャーを養成することを目的とする。文化資源の活用は、ユネスコの世界遺産に代表される遺跡・遺物あるいは民俗芸能の観光利用のみならず、伝統的薬草や医療技術の近代医療への応用、伝統工芸の最先端技術への応用など、豊かな将来性がある。その一方で、国際的にも国内的にも当該住民の文化的アイデンティティに国の政治的思惑や企業の経済利益が絡んで対立や衝突の絶えない、現代世界の直面する重要課題のひとつである。その早急な解決には、文化資源が持つ有用性を、一部の住民や国や企業の権利や利益に留めるのではなく、広く人類全体に開かれた管理・活用策を研究・立案できる能力を備えた人材の育成が急務である。本プログラムでは、「形態文化資源」「伝承文化資源」「保護・継承・活用」に関する知識と国際的・総合的・学際的視野を備え、マネジメント能力、ファシリテート能力、ネットワーク形成能力を備えた文化資源マネージャーの育成を目標とする。

そのために本プログラムは、海外交流校から募集する留学生4名と日本で募集する日本人学生4名のチームで5年間研究調査を行う体制をとる。1年次は講義による基礎知識習得と演習によるチーム・ビルディング、調査実習、2年次は日本および留学生の出身母国での文化資源継承・活用現場での研修をチームで行い、Qualifying Examinationの一環として研究レポートをまとめる。3年次は国際ワークショップで発表と、学生各自の研究対象を確定するための日本国内外の現場視察・予備調査を行い、4年次には各自の関心・対象に応じて単独あるいは複数人でインテンシブな現地調査を行い、5年次に調査結果を分析・考察して国際ワークショップで発表するとともに学位論文を執筆・提出する。これらの活動のほとんどを国際的な編成のチームで行うことで、コミュニケーション能力の向上と相互理解の基盤を築くだけでなく、出身各国の文化特質を確認し長所を見いだし発信する能力が鍛えられる。こうした人材は、文化資源においても収奪される側に甘んじている発展途上各国の政府機関や、伝統知識・技術の応用に関連した企業の研究機関などで高い需要が見込まれる。

特色・優位性

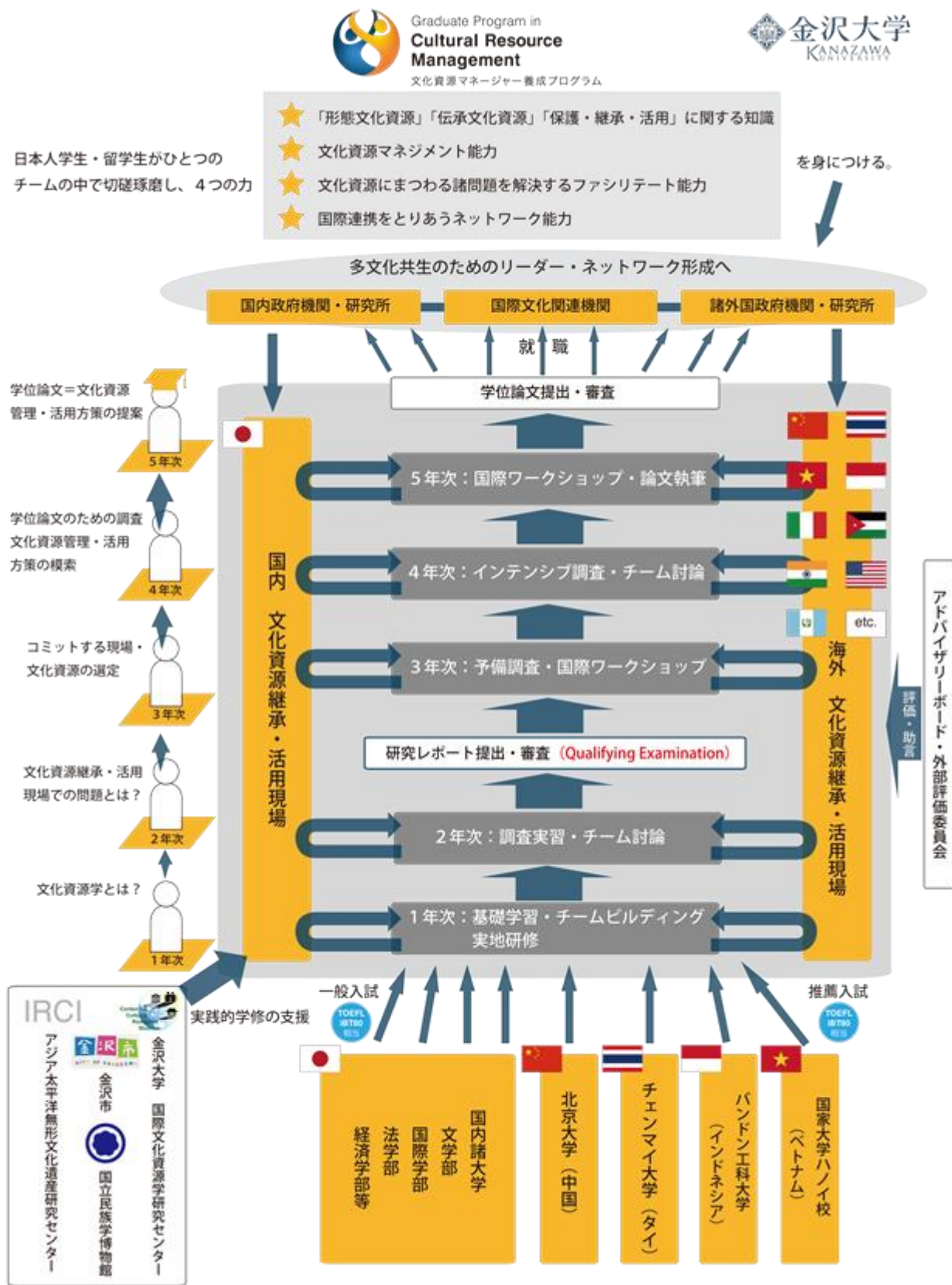
本プログラムを支える素地として、まず金沢を中心とした本学周辺の豊かな伝統文化資源がある。世界クラフト創造都市の金沢には金箔・陶磁器・漆器などの伝統工芸が今もしっかりと継承され、また近在には能登の世界農業遺産、白川郷の世界遺産などがあり、そこでの文化資源継承・活用実態は先進事例として格好の研修現場となる。他方留学生の募集先に想定している中国・タイ・インドネシア・ベトナムはいずれも経済成長著しい国で、その伝統文化の継承・活用が国家的な優先課題になっている。交流協定校の北京大学・チェンマイ大学・バンドン工科大学・ベトナム国家大学ハノイ校は各国の筆頭大学の一つで、文化資源関連の研究・教育も盛んであり、優秀な学生の確保が期待できる。

本学ではこれら協定校と連携して各種事業を展開してきた。平成19～21年度大学院GP事業ではこれらのいくつかかにリエゾン・オフィスを設置し、国際セミナーを実施した。平成21年度若手研究者交流事業では上記4大学他から14名の若手研究者を招いてアジア文化資源学シンポジウム金沢セミナーを、平成23年度国際大学交流セミナー事業では同じく4大学の大学院生・教員10名を招いて文化資源学アジア学生フォーラムを実施した。学内では平成22年度に先端的研究拠点として国際文化資源学研究センターを設置し、所属教員はヨーロッパから中央・東アジア、アメリカ大陸に至るまで、世界各地でプロジェクトを実施している。また平成24年度には人間社会環境研究科博士前期課程に文化資源学コースを開設した。本プログラムは前掲センター所属教員を中心に、文化資源継承・活用現場での実務者も指導に加わることで、文化資源学コースでの教育効果をさらに高めるための特別プログラムである。

以上、本プログラム申請・実施主体の人間社会環境研究科には下地となる教員組織、学生募集先、海外協定校との研究者・学生交流の点で十分な実績がある。加えて地元金沢や学内担当教員、連携機関スタッフの調査研究地である世界各地の文化資源活用現場など、本プログラムの研修・調査対象候補地を豊富に有する。それらを活用し、日本人学生とアジア各国出身の留学生が1年次からチームを組んで、各国の文化資源継承・活用現場での研修・調査を行いながら、アイデアを交換・発信しつつ、各自が特定の対象についての活用方策を提言していく点に特色がある。

プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)



プログラムの成果

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成するという観点に照らし、学生や修了者の活躍状況を含め、アピールできる成果について記入してください。)

本プログラムは有形・無形の文化資源という、従来考古学や美術史、文化人類学等の専門領域で研究対象とされてきたものを人類共通の文化資源と位置づけ、各専門領域でも通用する調査研究を実施してその人類的意義を明らかにするとともに、その将来に向けての継承活用策を模索する実践的なプログラムである点、またそうした学習・研修・成果発表の場を留学生と日本人学生がつねに一緒になって行うことで国際的発信力の鍛錬と、修了後の学生間の国際ネットワークを構築し、文化資源の国際的な有効活用に寄与する人材を輩出しようとする点を特色とする。そのために授業や口頭発表、論文は英語を基本とし、現地研修は日本国内のみならず海外協定校の位置するアジア4カ国で毎年複数回実施し、3年次には海外協定校のいずれかで研究発表を行う国際シンポジウム・ワークショップを企画運営するなど、グローバルに活躍するリーダーとしての視野と能力の育成に努めてきた。

プログラム修了生は平成30年3月修了の1期生3名のみだが、いずれも留学生のこの3名はそれぞれ自国に帰り2名は大学教員、1名は文化遺産研究所に早々と就職を果たしている。また1期生でまだ未修了のひとりはずでに東京文化財研究所に就職し、また同じ1期生で博士後期課程進学後にプログラムを離れて博物館等のマネジメントソフトを開発する企業に就職した者もいる。このほかにも2年で修士号を得てプログラムを終えた者も数名おり、それらも母国の大学教員や文物保護研究所、また日本の市役所等に着実に就職している。いずれの就職例も、本プログラムの学習内容を生かせる職種であり、すみやかに職を得ていることから、本プログラムの成果が認められた証拠と言える。

在籍中のプログラム生では4名が日本学術振興会特別研究員(DC)に採用されている(うち1名は他大学の博士後期課程に進学した)。これもまた本プログラムでの研究内容が認められた例と言える。また学外の競争的研究資金の申請も活発で、松下財団、富士ゼロックス財団、澁澤民族学振興基金などから調査研究資金を獲得してきている。

研究成果発表も活発で、これまでに東南アジア地域研究の国際的学術誌である *Southeast Asian Studies*、日本文化人類学会の英語機関誌 *Japanese Review of Cultural Anthropology*、日本中国考古学会の機関誌『中国考古学』、インドネシアのデザイン学をリードするバンドン工科大学発刊の *Journal of Visual Art and Design* など、第一線の学術誌にプログラム生の研究論文が掲載されている。

また海外の国際学会での口頭発表にも意欲的で、Royal Anthropological Institute 学術会議、Urban Ecologies Conference、International Conference on Traditional Forest Knowledge and Culture in Asia、Australian Anthropological Society 年次大会、European Association of Southeast Asia Studies 年次大会などにプログラム生が参加し口頭発表している。

プログラムの成果

(大学院改革につながる教育研究組織の再編等の学内外への波及効果や課題の発見について記入してください。)

本プログラムは金沢大学の文系の総合研究科である人間社会環境研究科ではじめての5年一貫英語プログラムであり、採択以来毎年一定数のプログラム生を受け入れて恒常的に教育・研究指導を実施してきた。金沢大学はその後平成26年度にスーパーグローバル大学支援事業にも採択され、全学の学部・大学院での英語プログラムの充実や授業の英語化に力を入れていくことになるが、本プログラムはその先駆例となったと言える。

金沢大学のスーパーグローバル大学事業のなかでは、異分野融合型人材育成をうたう「大学院GSプログラム」(大学院における異分野融合型教育プログラム)という学内の競争的資金配分が平成27年度からスタートした。これは大学院生の海外研究留学、海外インターンシップ、海外フィールドワークの組織的な促進を目指したもので、本リーディングプログラムがそのモデルのひとつとなっていると言え、本プログラムの課題をプログラム生以外にも拡大した「異分野融合型文化資源マネジメント教育プログラム」が平成27から平成31年度までの期限で採択されている。

金沢大学以外では、岡山大学のグローバル・ディスカバリー・プログラムが、本リーディングプログラムの一学年の定員枠組みを留学生と日本人を半数ずつにして共に英語で切磋琢磨させるという制度設計をヒントに設立されたと聞いている。